

没落した**貴族家**に
拾われたので

恩返し
で**復興**させます

5

六山 葵

Aoi Rokuyama

iii. 福きつね

CONTENTS

プロローグ

007

開戦の狼煙編

023

二対の悪魔憑き編

065

それぞれの戦い編

097

悪魔の過去編

153

魔導人形編

197

悪魔の英雄編

239

エピローグ

263

Botsuraku shita kizokuke ni hirowareta node
ongaeshide hukkou sascemasu



ルイズ

北方の領地をまとめる
貴族の子女。
負けず嫌いな
一面も。

マーク

レオンに初めて
できた友達。
魔法騎士団の部隊長を
任されている。

オード

学院時代からの
レオンの友人。
植物の知識が豊富な、
心優しい貴族家
当主。

ディーレン

アーサーと手を
組む魔法使い。
滅びた一族の復活を
目論む。

レオン

伝説の悪魔の魂を宿す
本作の主人公。
溢れる魔法の才能を
活かして実家の
復興を目指す。

アーサー

ヒースクリフの兄で、
王国の第一王子。
悪魔と共に、
王国騒乱の元凶。

ヒースクリフ

王国の第二王子。
レオンの良き
友人であり、
次期国王候補。

登場人物紹介



プロローグ

Botsuraku shita kizokuke ni hirowarera node
ongeshide hukkou sasemasu

目の前で燃える街並みを王国の第二王子、ヒースクリフ・デュエンは眺めていた。

見知った土地。見知った建物。生まれてから今日まで過ごしてきた王都の街が赤く燃え盛っている。

それなのに足は一步も動かすことができなかった。

「やめてくれ！」

口から出たその叫び声は轟く爆発音にかき消される。

魔法が飛び交っている。

王都の中心で……至るところで……

見知った顔が戦っている。

ダレンが、マークが、ルイズが……そしてレオンが。

血を流し、今にも倒れてしまいそうな風体で。

「僕の……せいなのか」

ヒースクリフは膝を地面についた。もうそれ以上、壊れていく街と死へ向かっていく仲間を見て

いられなかったのだ。

「そうだ。お前のせいだ」

声がした。

振り向くとそこには見知った顔があった。

「兄上……」

ヒースクリフの兄、この国の第一王子であるアーサー・デュエンが立っている。

「これは全てお前のせいだ」

アーサーはそう言ってヒースクリフを責める。

ヒースクリフは頭を抱え、それを否定した。

「違う。僕は兄上を止めようとしたんだ。この国を守るために」

自分に言い聞かせるようにそう言った。

アーサーが鼻で笑う。

「本当にそうか？」

その言葉にヒースクリフはドキリとした。

胸の奥。どこか深いところにアーサーの言葉が突き刺さる。

「お前は無駄にことを荒立てた。王位継承を俺に任せておけばよかったのに、お前は王位を欲した。」

そのせいで、多くの人が死ぬんだ」

アーサーは言葉が続けた。声色の一つ一つに嘲笑が含まれている。

「違う。僕は王位なんて欲しくなかった。でも……父上や兄上に任せてはこの国が壊れてしまう。僕はそれを止めなければならぬ」

そう言い返すが、やはり迫力がない。

自分でもどこか真実味が足りないような気がした。

「いいや、それこそ違う」

反対にアーサーの言葉には自信が溢れていた。

自分こそが正しいと信じ、まるで疑っていない。

「お前はアイツに出会い、自分にも勝ちの目が生まれたと勘違いしたのさ。そして、傲慢にも王座を欲した。お前のようなやつには決してふさわしくない王座を」

「アイツ」と言いながらアーサーはヒースクリフの後ろを指さした。

その指の先を目で追うと戦っているレオンがいた。

「だが、お前の頼みの綱も俺の切り札には敵わない」

アーサーの聲が頭の中で響く。

レオンの戦っている相手の顔が見えた。

謎の魔法使い、ディーレインだ。

杖の代わりに黒い鎌を持っている。その鎌が高く持ち上げられ、そのままレオンの首めがけて振り下ろされた。

「やめろー!」

ヒースクリフの叫び声は暗い闇の中に消えていった。

◇

目覚めると額にぐっしよりと汗をかいていた。

呼吸が荒い。酷い悪夢だ。

ヒースクリフはベッドから起き上がり、グラスに水を注いだ。

一息に飲み干して心を落ち着かせる。

同時に部屋の扉をノックする音が響いた。

「ヒース? 大丈夫?」

よく知る声が聞こえる。ヒースクリフが扉を開けると、そこにはレオン・ハートファイリアが立っていた。

「あ、ああ。大丈夫だ。それよりもどうしたレオン」
たった今見た夢の内容は臆げにしか覚えていない。それでも不快感は残っている。

悪夢にうなされていたとは言えずヒースクリフは取り繕った。

「いつもより起きるのが遅いから様子を見に来たんだ。皆、もう下に集まっているよ」

レオンはヒースクリフがどこかおかしいことに気付いていたが、彼が「大丈夫」だと言うので様子を見ることにした。

レオンの言葉にヒースクリフは頷く。

手早く最低限の身なりを整えると二人で部屋を出た。

廊下を歩き階段を下りる。

香ばしい匂いのする厨房をすり抜けて向かったのは、地下室だった。

ここは商業都市リーン。

王都から程近く、各街への道も比較的整備されている。国中のあらゆる地域から品物が届き、交易が盛んに行われる商業の中心地だ。

その商業都市の飲食店の一つをレオンたちは隠れ家として使わせてもらっている。

店の所有者はクエンティン・ウォルス。レオンたちよりも二つ年上の魔法使いで、魔法学院時代の先輩でもある。

優れた魔法使いでありながら卒業後は商人としても大成したクエンティンは、快くこの場所を貸してくれた。
身を隠すのには理由がある。

第一王子アーサーが第二王子ヒースクリフの処刑を目論んだためだ。

全ては自分が王位を継ぐため。処刑はレオンたちの活躍により阻まれたが、アーサーは王都の乗っ取りに成功した。

実の父親である国王に魔法をかけ傀儡とし、実権を握っている。

レオンたちはアーサーと彼に協力する謎の魔法使いディーレインを止めるべく、精霊王のもとへ助力を乞いに向かい、彼の住む精霊界で修業を終えたばかりである。

時の流れが違うという精霊界の性質のおかげで、向こうに滞在した日数に比べてこちらではそれほど時間は経っていない。

それでも、ヒースクリフがいない間にアーサーは各方面に根回しをし、準備を進めていた。

第一王子と第二王子。

国を二分する二人の戦いの火蓋が切られる時は、すぐそこまで迫っている。



「やはり密かに王都に侵入し、少数精鋭で第一王子の身柄を拘束するべきではないか」

「いやいや、それは無謀すぎる。リーンには多くの魔法使いたちが集まり、街を囲む壁もある。この場に留まって防衛戦をするべきだ」

ヒースクリフを前にして熱い舌戦が繰り広げられる。

部屋の中にはヒースクリフ派として残った僅かな貴族たち。

ヒースクリフを側で支えてきたダレン。共に精霊界に向かい力を蓄えてきたマーク、オード、ルイズ。そしてレオンがいた。

舌戦を繰り広げるのはヒースクリフ派の貴族たち。それぞれが自分の考えを主張し、他者の意見に反論する。

皆ヒースクリフにいいところを見せたいのだ。ここで功績を挙げられればヒースクリフが王になった時にいい思いができる。

ヒースクリフが実際に活躍の差で待遇を変えるかは別として、少なくとも集まった貴族たちはそう考えている様子だった。

どの貴族も現国王の体制では弱小と呼べる貴族たちだ。

与えられた領地は王都から遠く離れた辺境の地ばかり。領主とはいえ国税を納めるのに手一杯で贅沢な暮らしを送れている者はほとんどいない。だからこそ、ヒースクリフ側に味方しているとも言える。

王都やその近辺に住む貴族たちはほとんどがアーサー派になった。

アーサーが国王になればそれまでと変化が少なくて済む。現国王の下で私腹を肥やしてきた貴族たちには、今の体制が続いた方がいいと考える者も少なくなかった。

現在、それなりに優遇された地位につきながらアーサー派から離反した有力貴族たちは、オードの実家、マグナガル家。

レオンたちと学院時代を共に過ごし、現在はオードの勧めで他国に避難しているニーナ・レインの実家、レイン家。

それから病に侵されていたことを理由に早々に代替わりした、ダレンのロアス家などが主だった。中でもロアス家は王族とも仲のいい格式高い家系である。そのダレンがヒースクリフの味方になったことを理由に彼らについてきた貴族たちもいる。

そんな貴族たちが密かに集まり話しているのは「どうやってアーサーを倒すか」、その一点のみだった。

会議は三日目。

連日、日が昇る前から日没後夜遅くまでずっと行われているが、まだ妥当な案は出ていなかった。貴族たちから意見が出すぎていて、それを一つにまとめられないのだ。

ヒースクリフが一言「こうする」と発言すれば周囲の人間もそれに従うのだが、彼はまだその決断を下せずにいた。

今も言い争う貴族たちを見つめ、思い詰めた表情をしている。どうするべきか。

その答えはヒースクリフの中ではもうほとんど決まっていた。しかし、それを言葉にして皆に伝えようとすると声は喉のあたりで詰まって出てこなかった。

先程見た悪夢が脳裏をよぎる。

この決断をすればあの悪夢が現実になってしまいかもしれない。そう思うと怖くてたまらなかつた。

「少し時間をくれ」

そう言うとヒースクリフは部屋を出ていってしまふ。

残された貴族たちはその背中を見送りながら顔をしかめた。

部屋の中に不穏な空気が充満している。

「大丈夫か？ アイツ」

レオンの隣にいたマークが呟いた。

明らかに様子のおかしいヒースクリフを見て、皆心配している。

「少し様子を見てくるよ」

レオンは全員に聞こえるように言ってから、部屋を出てヒースクリフの後を追った。

◇

リーンの街は元々平原だった場所に作られた平坦な土地を持つ。

東西南北のどこを見ても高低差が少なく、平坦なゆえに街中でも馬車が通りやすい構造になっている。その街の中で、唯一意図的に高く作られた広場がある。

魔法で盛られた土の上に作られた広場からはリーンの街が一望できる。街だけではない。そこならなば街を取り囲む石造りの壁の向こうも見えた。

草原の向こうに森が続く。見えはしないが森の向こうにも大地が続いている。故郷である王都にもこの大地は繋がっている。

丘の上から見えない故郷に思いをはせながら、ヒースクリフはただ黙って時を過ごした。

頭の中で考えが巡る。思考が薄れ、呆然と景色を眺める時間が訪れる。かと思えば、間近に迫る決戦の前に不安が押し寄せる。

そんな風に繰り返し考えを循環させていると背中に声がかかった。

「ヒース。街の中とはいえ、一人で行動するのは危険だよ。アーサー派の魔法使いが忍び込んでいるかもしれない」

振り向いてヒースクリフは友を見つめた。

その優しい表情を見ると、心が落ち着く気がした。

「レオン」

ヒースクリフが呟く。

レオンは彼の隣に立った。ヒースクリフは少しの間その顔を見つめていたが、レオンが何も言わなかったので視線を壁の向こうに戻す。

「情けないところを見せた。君にも、皆にも」

レオンが口を開くより先にヒースクリフが言った。

第二王子として、これから国王になる者として、自分が皆に示さなければならない姿はわかっている。

決してブレることなく、皆を導いていかなければならない。そういう姿勢を直接行動で示さないといけない。そうしなければ誰も自分にはついてきてくれないのだと、頭の中ではよくわかっている。

しかし、実際にできるかと言われればそんなに簡単なことではなかった。

「怖いんだ」

こぼれ出た言葉。それはヒースクリフの本音だった。

「決断するのが怖い。僕の決断で多くの人間が命を落とすことになる。その責任を負うのが怖い。兄上に勝ったとして、本当に僕が皆の国王にふさわしいのかはわからない。僕にできるのか？ 僕なんかに……皆の期待が怖いんだ」

吐き出された言葉は空中で溶けるように消えていく。その弱々しさが今のヒースクリフを表しているようだった。

レオンは彼の言葉をじっと聞いた。途中で何か口を挟むことはなく、ただヒースクリフの思いを受け止めた。

やがて、ヒースクリフが全ての思いを吐き出し終わると、レオンはようやく口を開いた。

「ねえ、ヒース。覚えている？ 僕たちが初めて出会った時のこと」

ヒースクリフは一瞬戸惑った顔をした。レオンが何故急にそんなことを言い出したのかわからな

かった。

その時のことはよく覚えている。しかし、今それが何の関係があるのか。

「君は初め、すごく嫌なやつで。僕だけじゃなくて全ての平民を見下していた。僕を学院の闘技場に呼びつけて、それからダレンを使って懲らしめようとしたよね」

レオンは一つ一つ思い出すように言った。その表情は柔らかい。思い出を懐かしんでいる顔だった。

その時のことをヒースクリフもよく覚えている。

魔法学院に入学した頃、彼はただの王族だった。学院の外にいる貴族たちと同じように平民を見下し、バカにしていた。だからこそ、没落した貴族家の出自でありながら圧倒的な才能を見せるレオンが許せなかったのだ。

その思いは闘技場でレオンに負けた後も消えることはなかった。

圧倒的な敗北感を味わいながら、どうしてもそれを認められなかった自尊心。そこを悪魔に利用され、支配されかけた。あのまま闇に落ちていれば今、自分はここにいなかったとヒースクリフは知っている。

確かにもう過去の出来事だ。学院を卒業して数年が経った。あの時の子供じみた自尊心を抱える王子はもういない。

それでもその過去を懐かしむことはヒースクリフにはできない。

思い出に昇華させてはいけない。

自分への戒めとして、いつまでも覚えていなければならぬ出来事だと思っている。

それなのに、レオンはまるで楽しかった出来事を振り返るかのように語っている。

「それからも色々あったね。悪魔と断定されて投獄された僕を君が逃がしてくれた。アーサーを倒すために、精霊界にまで一緒に行ってくれた。僕がいない間もずっと戦ってくれた」

レオンはそう言うってから街を指さした。

「今、この街にはいろんな人が集まっている。僕たちに力を貸そうと辺境の各地からいろんな人たちが。それは魔法使いだけじゃない。平民も、貴族も、魔法を使えない人たちも。皆、ヒースの力になるうとやって来たんだ」

レオンの指先に誘われるようにヒースクリフは視線を壁の内側に移した。街が見える。建物が並び立ち、そこに住む人たちがいる。

実際、リーンには多くの魔法使いたちが集結している。

ヒースクリフの思想に賛同した辺境の貴族たち。学院時代に共に学んできた同級生たちだ。

しかし、それに負けないくらい非魔法使いも集まっていた。

リーンに元々住む人たち。彼らは王都で何かが起こり、ヒースクリフが追われる立場だとわかっ

た上で匿^{かくま}つてくれている。一時的にでも避難してほしいと頼んだヒースクリフを突っぱねて、街に残り続けることを選んだ。

その他にも、辺境から魔法使いと一緒に来た者たちもいる。

魔法が使えない彼らは戦いでは力にはなれない。それでも自分たちに何かできることはないかとリーンまで来てくれたのだ。

「ね？ この街には今魔法使いと非魔法使いが一緒にいるんだよ。貴族も平民も関係ない。皆が皆明日を迎えるために懸命に生きているんだ」

レオンの言葉がヒースクリフの心の奥の方に届いていく。

温かかった。凍^こりついた心を溶かしてくれるようだった。

ヒースクリフには少しずつ、レオンが何を言おうとしているのかわかってきた。

「君は『怖い』と言うけれど、皆を導くなんてずっと君がやって来たことじゃないか。この街にこれだけ多くの人が集まってくれたことがそれを証明している。これは全て、ヒースが先頭に立ってくれたことの結果なんだよ」

レオンはそう言って笑った。

状況が何か変わったわけではない。

それでもヒースクリフは自分の視界が開けていくような思いだった。

開戦の狼煙編

Botsuraku shita kizokuke ni hirowareta node
ongaeshide hukkou sasemasu

果てしなく長い廊下にディーレインは立っていた。

動きを確かめるように自分の手を握りしめて、そこが夢の中だということに気付く。正確には意識だけの場所。精神世界と表現するのが正しいだろう。

精神世界とはいえ、見た目的な肉体は存在する。ディーレインが思った通りに体は動き、不自由もない。

しかし違和感が残る。自分のものでありながら借りもののような感覚。言葉にして説明するのが難しい体験にディーレインは少し気持ち悪さを感じた。

廊下は果てしなく長い。前方にも、後方にも奥が見えないほどまっすぐに延びている。

気付いた時にはそこにいた。どちらから来たのかもわからないのに、不思議と進むべき方向はわかった。

歩んできた道は薄暗く、なんの光もない。これから進んでいく道は、それ以上に暗く見える。

ここは一体どこなのだろうか。

ディーレインは考える。

レオンの身体の中にいるファ・ラエイルとかつて友情を築き、今はディーレインの身体を器とする悪魔、ア・ドルマの作り出す精神世界に、こんな廊下はない。

彼の世界は石造りの城がモチーフになっている。今いる廊下は木材を基調にした造り。赤いカーペットが延々と続いていて、装飾も城で目にするものとは違って見えた。

ただの夢か。それとも何か意味があるのか。

考えても答えはわからない。

ただ、この夢の中でやらなければいけないことはわかる。

進むべきだと思う方向に足を踏み出せばいいだけだ。それはわかるのだが、ディーレインの足は一向に進まなかった。

何もできないまま、ただ時間だけが過ぎていった。

◇

目が覚めると、自分の頬ほおに手が触れていることにディーレインは気付いた。

その腕の先に目をやり、見開く。

「ファナ……」

死んだはずの妹の名前を呼び、ディーレインはハッとする。違う。

目の前にいるのは妹ではない。

ゾツとした感覚が襲ってくる。

「目が覚めたか……」

愛しい妹の顔を持った女性は酷く冷たい声で語りかけてきた。

「王子が呼んでいる。私は呼びに来ただけだ」

女性はそう言うつてすぐに部屋を出ていこうとする。その後ろ姿にディーレインは思わず声をかけた。

「待て」

女性は扉の方を向いたまま立ち止まる。

ディーレインの次の言葉を待っているようだ。

「確か、ア・シュドラだったな。すまない。妹と間違えた」

ディーレインは記憶を遡り、女の名前を思い出した。

妹のファナの肉体に宿った悪魔はア・ドルマの忠実な部下、ア・シュドラだった。

異なる魔力の性質のために、人間界では自分の肉体で存在できない悪魔たちに自分の一族——か

つてハルバシオンという島国で反乱の中心となった、魔法使いの一族であるシドルト族の身体を貸し与えたのは、ディーレイン自身だ。

そこには一族を復興させるためにア・ドルマと交わした契約が関係しているが、咄嗟のことで頭が混乱してしまった。

シュドラは疑問に思った。何故この人間は今謝ったのだろうか、と。

その疑問が表情に出ているのだろう。

ディーレインは取り繕うように言葉を続ける。

「その体は確かに妹のものだが、今はアンタのものでもある。悪魔は人間が嫌いだと聞いた。人間の名前で呼び間違えられるのは嫌だろう」

ディーレインは自分でもおかしなことを言っていると思っただ。

その時は確かにそう思ったのだが、こんなことを言われても悪魔は混乱するだろう。

「くだらない」と一蹴されるだろうと思っていた。

しかし、シュドラはクスツと笑った。

その笑顔にディーレインは再び妹の面影を見る。

「お前は不思議なやつだ。身を焦がすような復讐心に駆られているかと思えば、不意にそんな言葉を口にする。お前のようなやつを見ていると人間も少しは面白いと思えてくる」

棘のない言い方だった。本心からそう思っているのだろうかという印象を受ける。今度はディーレンの方が戸惑う番だった。

「アンタは……他の悪魔とは少し違うような気がするな」

シユドラはディーレンの目をしっかりと見て話をする。そんな悪魔はここには他にいない。ディーレンの中には悪魔のリーダーであるア・ドルマの魂が存在しているが、他の悪魔たちはディーレンを見る時、軽蔑した視線を向ける。

自分たちの族長と、身体を共有している人間を完全に分けて見ているようだ。

そればかりか、意識をア・ドルマに差し出さず今もこうして活動しているディーレンを疎ましく思っている節もある。それに比べるとシユドラの態度は随分と良心的に見える。

「お前は人間が好きなのか？」

続けて出た言葉にア・シユドラはギョツとした顔をした。彼女の表情はすぐにいつもの冷たさを取り戻す。

「ふざけたことを言うな」

と、今度は棘のある言い方で言って、部屋から出ていってしまふ。

残されたディーレンは閉じた扉を見つめつつ、先程夢で見た暗い暗い廊下のことを考えていた。



呼びつけられるままにディーレンが向かったのは王宮の調見の間だった。入つてすぐ、室内が異様な雰囲気に含まれていることに気付く。その理由は考えるまでもなかった。

中央にある玉座には第一王子アーサーが偉そうに座っている。自分が王位を得るために実の弟にあらぬ罪をかぶせ、拷問までした男は今日もふてぶてしい態度で笑っている。

その横には本来置かれるはずのないもう一つの玉座。そして、そこに座るはずの男に付き従う八人の魔法使いがすでに側に控えている。

ア・シユドラと同じく、ディーレンの同族の身体を乗っ取った悪魔たちだ。

目的は人間界を制圧し、滅びゆく魔界から移住すること。そのために全ての悪魔が人間の身体を乗っ取れるように画策している。

姿こそ人間だが、彼らは禍々しい殺気を発している。

アーサー派の貴族たち、集まった兵士たちは皆その異様な雰囲気呑まれていた。

彼らは八人の魔法使いたちと対象になる位置に立っている。人数こそ多いが、そのオドオドとした様子は頼りなく見える。

八人の魔法使いの殺気にあてられたのか、それともこれから始まるであろう戦いに怯えているの

か、あるいはその両方か。

とにかく、両者の間になんとも言えぬ空気の違いのようなものがあり、それが異様な雰囲気の正体だった。

ディーレインはアーサーの後方に不自然に並べられた二つの椅子を見る。

どちらも簡素な作りで、玉座の後方に置くにはふさわしくない。

その椅子に座らされた二人の人物は、仮面をつけているかのように感情の読み取れない顔をしている。

現国王のアドルフと聖レイテリア教会の司祭エルシムである。

ディーレインはこの二人がア・ドルマの魔法により感情を奪われ、従順な人形となっていることを知っている。

しかし、事情を知らないアーサー派の魔法使いたちには、突如として無口になったこの二人はよほど不気味に見えるだろう。

彼らの不安を煽った一つの要素でもある。

「ようやく主賓のおでました。皆の者、敬意を払え」

アーサーは機嫌が良い。扉を開けて入ってきたディーレインを見るとにつこりと笑ってそう告げた。

アーサー派の魔法使いたちはお互いに顔を見合わせてから、ぎこちなく片膝をついた。貴族の作法で相手に最大限の敬意を示す時のポーズだ。

得体の知れないディーレインに不信任感を募らせている者も多いだろう。だが、彼らにとつてアーサーは唯一絶対の存在であり、逆らうことは許されない。アーサーの命令ならばディーレインに対し膝をつくことくらいいわけもない。

ディーレインは跪く貴族たちを尻目に中央まで歩み寄ると、用意されていたもう一つの玉座に座る。

ソレに合わせて八人の魔法使いたちが膝をつく。こちらは貴族たちとは違い、不服さがありありと表情に表れている。

ディーレインの同胞であるシドルト族の肉体を手にした悪魔たちだ。

彼らが付き従うのはディーレインではなく、その肉体の中にいるア・ドルマだ。本来ならば人間であるディーレインに頭を下げるなど屈辱以外の何物でもないが、彼の中に潜む悪魔、ア・ドルマの厳命に従っている。

アーサー派の貴族たちとタイミングをずらしたのは、決してアーサーの命令を聞いたわけではなという最低限の主張だ。

「ようやく準備が全て整った。明日になれば僕もついに国王だ。今日まで、皆には様々な苦勞をか

けたと思う。まずは皆に感謝を述べよう」

ディーレインが席につくとアーサーは語り出す。台本でも読むような、どこか感情の籠もっていない声だった。

少なくともディーレインにはそう感じられた。彼の裏の顔を見て知っているからこそ、余計にそう感じたのだろう。

「僕が国王になることは父と司祭殿も認めてくれた。ねえ、そうでしょう？」

アーサーが後方を振り返り、アドルフとエルシムに問う。

二人は瞬き一つせず、

「はい」

と声を揃えて答える。

「茶番だ」とディーレインは思った。

魔法で心を操っているのだから、アーサーの思うように返答するのは当然のこと。それにしたってもう少しバシバシのように装うことはできたはず。

二人の様子はそれなりに魔法を扱える者が見ればすぐに洗脳状態だとわかる。返答のさせ方ひとつで、もう少しわかりづらくすることもできるはずだ。

それをしないということが、アーサーに隠す気がないと証明している。

当然、アーサー派の貴族たちも気付いているだろう。指摘しないのはそこに打算があるからである。

このままアーサーについていけば自分の家は安泰だ、という考え。もしくは単純に逆らうのが怖いだけか。

その様子にディーレインは苛立ちを覚える。

自分には関係のないことだ。むしろ、この世界を滅ぼすためにはこのままアーサー王子に踊らしてもらう方が都合がいい。

そう頭でわかっているはずなのに、ディーレインの胸の内はグツグツと煮えるように熱かった。

脳裏に思い出したくない過去がよぎる。

自分の利益のためならば非道なことにも目を瞑れる人間の浅ましさ、醜さが見える。吐き気がするほどに嫌悪感を抱いた。

◇

翌日。まだ太陽が昇って間もないというのに王都の王宮前広場には多くの人が集まっていた。ガヤガヤと賑わう住人たちは皆、新たな国王の誕生に立ち会うために集まったのだ。

その中の何人が心からアーサーを祝福しているのだろうか。恐らく半数もない。

ヒースクリフが逃亡した件を国民は知っているし、このまま何事もなく儀式が終わるとも思っていないかった。

ただ、ここに集まらなければ、アーサーが無事に王位を継いだ時になんと言われるかわからない。非国民と罵られ、反逆者に仕立て上げられてしまう。貴族も平民も関係なく人々は恐怖心から集まっただけだ。

国民から支持を得られていない。この事実はアーサーにとってはどうでもいいものだった。心の中でどう思っているように彼らはアーサーの命令には従順だ。

行動に起こさなければどう思っているにも関係ない。彼らの中に自分の意見を口にする勇氣のある者がいれば、状況は変わっていたかもしれない。

王宮の上階。広場を見渡せる場所に作られたバルコニー。用意された壇上にアーサーは立つ。白い派手な衣装が風に揺れてなびく。

集まった住人たちの視線がアーサーに集まり、アーサーは彼らを見下ろした。

「こんなものか」

誰にも聞こえないほどの声でアーサーは呟く。生まれてから今まで、ずっと追い求めてきたものが手に入るというのに自分でも驚くほど冷静だった。

アーサーの目には自分を見上げるこの国の民たちがひどく滑稽に見えた。一人一人の顔は見えない。しかし、全員同じに見える。

まるで人形だなど、アーサーは思った。

自分が右を向けと言えば右を向き、左を向けと言えばそれに従う。従順で愚かな木偶人形だ。儀式のために後ろに控えているアドルフ国王を振り返り、アーサーは納得した。

悪魔の魔法により感情を奪われたアドルフと、眼前で心にもない賛辞の言葉を述べている国民たち。この国にはもう操り人形しかない。

「この国はもう……何年も前から終わっていたのだな」

悲しそうに、それでいてどこか他人事のようにアーサーは言う。

自分は今からこの壊れた国を治める立場になる。そして、国王になってからもこの国が変わることはない。

民は妄信的に従うのみ。それが自分たちの首を絞めつけることになろうとも彼らは気付かない。実に愚かだ……だが、それでいい。

国民を見下ろし、アーサーは静かに思った。

一つ息を吐いて、その分を吸い込む。

声がよく通るように魔法使いが魔法をかける。

アーサーの声は王都中に響く。

「聞け、我が民よ。ついにこの日が来た。父から私へと時代が継承される日だ。まずは我が父の今日までの偉大な統治に感謝の意を述べよう。そして私は約束する。この国をこれまで以上に良き国へと発展させていくことを」

ワアツと歓声が上がった。

耳に入るその声はアーサーにはひどく乾いたもののように聞こえる。

自分の口から飛び出た言葉がなんとも薄っぺらく思えた。

壇上に聖レイテリア教会の司祭エルシムが上がる。その手には先程までアドルフが身につけていた王冠がある。

アーサーが命じた通りにエルシムが神への賛辞の言葉を述べる。

この王冠をアーサーの頭の上に載せれば、国王になる儀式は終わる。

「我らが唯一の神、レターネよ。この若く新しき王に祝福を……新しき時代に栄光を」

抑揚のない声でエルシムが言う。

アーサーは頭を下げ、王冠が載せられるのを待った。

ざわめきが起こった。不穏な気配を感じてアーサーは頭を上げる。目の前にいたはずのエルシムの姿がない。

代わりに立つ男がいる。アーサーの目はその男の持つ王冠に向けられる。

「兄上……当然ながら邪魔させていただきます」

左手に王冠を持ち、右手に持った杖を向ける弟にアーサーは高揚した。

来るのはわかっていた。今日を越えればこの弟にできることなどなくなるのだから。しかし、来ないかもしれないも思っていた。

アーサーはまっすぐに来訪者の目を見つめる。濁りのない純粋な目だった。自分とも、父とも、国民たちとも違う。

本当に心からこの国の発展を願う者のまっすぐな目だ。この国において唯一、目の前の男だけが自分の操り人形でないことをアーサーは知っていた。

立ち塞がったのは第二王子、ヒースクリフ・デュエンだった。

アーサーはヒースクリフを睨みつける。そしてすぐに視界を左右におどらせる。

つい先程まで目の前に立っていたはずの司祭の姿がない。

「エルシム司祭をどこにやった」

「精神に魔法をかけられていたようなので避難させました。僕の友人の風精霊は人を隠すのが上手いように」

ヒースクリフには余裕があるようにアーサーは思った。こんな状況で一人乗り込んでくるのだから



ら策があつて当たり前だろう。

「き、貴様！ これは明らかな反逆行為だぞ」

後方から儀式を見守っていた貴族の一人が声を荒らげる。

その言葉にヒースクリフは不思議そうな顔をする。彼からすれば「何を当たり前なことを」と言い返したい状況である。

ヒースクリフは声を荒らげた貴族と実の兄アーサーを交互に見やり、得心がいったように頷いた。その貴族の態度が本心かどうかはさておき、アーサーからすればこれは茶番なのだ。

ヒースクリフが王位を継ぐのを邪魔しに来るのは、当然アーサーにも読めていたはず。その気になればヒースクリフがここに辿り着く前に防ぐことも可能だ。

そうしなかったのは自分をここに呼び寄せることに意味があったからだと気付く。

ヒースクリフはすっかり静まり返った王都の住人たちを横目に見る。彼らは何が起きているのか完全には把握できずに息を呑んでいる。

アーサーの狙いはここだろう。ヒースクリフが「反逆者」であるということを見せつける。そのためにヒースクリフを泳がせていたのだ。

「相変わらず腹黒い」

アーサーに向けた杖を下げることなく、ヒースクリフは呟いた。ここで反逆者にされることに抵

抗はない。

どんな形であれ、アーサーが王位を継ぐのを止めるのがヒースクリフの目的なのだから。

「王に仇なす逆賊だ！ 引つ捕らえろ」

先程声を荒らげた貴族とは別の貴族が命令する。その号令に合わせて、王宮の衛兵たちがヒースクリフを取り囲む。

焦っている様子はなく、事前に準備された動きであると思われるほど統率が取れている。

号令した貴族自身も杖を取り出し、ヒースクリフに向ける。

彼はその貴族に見覚えがあった。

「これは……バルドルト卿、あなたならもつと冷静な判断を下せると思っていました」

王宮貴族、ダン・バルドルト侯爵である。

アーサー派の筆頭であり、腕利きの魔法使いでもある。その明晰な頭脳と冴え渡る魔法の才は国内でも随分と有名だ。

「ヒースクリフ様、申し訳ないがここで全てを終わらせていただく。王位を継ぐのはアーサー様だ」

バルドルトの杖が光る。魔法が発動する。杖先から放たれた雷は一直線にヒースクリフに飛ぶ。

光の速度で放たれた魔法は周囲の人間からすれば何かが一瞬光った、という程度にしか認識でき

なかっただろう。

反応したのはヒースクリフだけだった。雷の魔法が胸に届く寸前でヒースクリフは身を翻し、

間一髪でかわした。

さらに、くるりと姿勢を制御して、振り向きざまにバルドルト卿に向けて魔法を放つ。

ヒースクリフの杖から放たれたのは風の魔法だった。無数に飛び出た風の刃がバルドルト卿を襲う。

「……やりおる」

バルドルト卿がその風の刃を防ぎ、再びヒースクリフの方に視線を向けた時にはすでにそこに彼の姿はなかった。

「探せ！ あれほどの速度で転移の魔法を構築できる者はいない。やつはまだこの近くにいないぞ」
バルドルト卿の命令に従い、衛兵たちが走り去っていく。それを確認してからバルドルトはアーサーのもとへ向かった。

「若、すぐに賊を捕まえますゆえ、もうしばらく辛抱を」

「放っておけ、儀式を再開せずに王位につけばいい。そうすればアイツにはもう何もできん」

「ですが……」と言いかけて、バルドルトは先程までヒースクリフが立っていた場所を見る。

その視線でアーサーも気が付いたらしい。

国王の象徴である王冠がなくなっている。
ヒースクリフが持ち去ったのだ。

「あれは教会の権威の象徴でもある。あれがないと国民は納得しない」

アーサーは少し苛立った様子で言う。確かにヒースクリフがここに来ることは予想していた。しかし、すぐに捕らえられるつもりでいた。

衛兵を近くに配置し、バルドルトもいたのだ。

何より、ア・ドルマと契約したことにより得た新たな力。八人の魔法使いたちがその場にいたのだから。

しかし、ディーレインをはじめ、他の八人の悪魔たちも決して動こうとはしなかった。ヒースクリフが現れた時も、逃げる時も用意された椅子に座って眺めていただけだ。

「どういうつもりだ」

アーサーはディーレインを睨みつける。ディーレインがクスツと笑ったようにアーサーには見えた。

「いやはや、まさかあそこまでの早業で逃げられるとは思っていなかった。油断だな」

ディーレインは悪びれもせずと言う。その様子にアーサーはさらに苛立つが、ここで取り乱しても仕方がないと自分を抑える。

「さっさとやつを捕まえてこい。契約はまだ有効のはずだ」

ディーレインはやれやれ、といった様子で立ち上がる。そして、八人の魔法使いたちに「行くぞ」と短く言うと、その場を後にした。

それと入れ替わりに衛兵の一人が現れる。そして、息も絶え絶えにこう言ったのだ。

「王都の方々に火の手が上がっています！ ヒースクリフ派の仕業です」

その言葉を聞いてアーサーは外を見た。少なくとも見える範囲だけで三箇所、黒い煙が立ち上っていた。

◇

王都の西。大通りの真ん中に、ヒースクリフ派の魔法使いたちが集団で作業をしている場所があった。

手押しむの荷車に藁わを敷き詰め、それに火をつけている。そのままでは白くなってしまいう煙に魔法をかけて黒煙を生み出している。

「あの……マーク隊長。本当にこんなことをしていいんですか？ わざわざ敵に位置を知らせるような真似をして」

燃料となる藁をひとまとめにしながら青年が聞く。魔法騎士団時代、マークの部下だった男だ。マークは王宮のある方角を見上げる。ここからでは建物が邪魔をして、王宮の姿をはっきり見ることはできない。

しかし、騒ぎが起こった気配は感じ取っていた。その様子からマークはヒースクリフが作戦の第一段階を成功させたことを察する。

「いいんだよ。俺たちの目的はレオンとディーレインを一对一にさせることだ。こうして目立っておけば相手の注意を引ける」

そう言うとマークは他の魔法使いたちに藁をもっと高く積み、火をさらに大きくするように指示を出した。

「大丈夫でしょうか。悪魔に憑かれたという魔法使いたちが集団で攻めてきたらヤバいんじゃない」

青年はなおも不安そうな顔をしているが、マークは特に気にしている素振りを見せない。

同時に八箇所黒煙を焚いているため、複数の場所に敵が張り込んでいることに相手も気付いているはず。

冷静で慎重な指揮官がいれば、うかつに戦力を分散させることはないかもしれない。

しかし悪魔は違う。人間を侮っているやつらなら、必ず一人ずつバラけてやって来るだろうという確信がマークにはあった。

「それはないだろう。アイツらの目的はヒースクリフが奪った王冠だ。それをいち早く探して取り返すなら分かれた方が効率的だしな」

二人が話している間にも荷車の上の藁はメラメラと燃えている。

そろそろ衛兵たちがこちらへやって来てもいい頃だとマークが思っている——

「報告！ アーサー派の魔法使いたちがこちらへ来ます！」

見張りに行かせていた者が声を上げて戻ってきた。

よし、とマークは手のひらを拳で叩くと、

「お前ら、火はもういいぞ。悪魔は俺が相手をする。お前たちは他の衛兵を引きつけてくれ」と指示を出した。

その頃には「飛行」魔法を使った敵の魔法使いたちが建物を飛び越えて姿を見せていた。

マークは腰に差した剣に手を伸ばし、魔力を溜める。

「やるぞ、ファルトス」

その声に返事はなかったが、マークは心の中で気持ち重なるのを感じていた。

現れたアーサー派の魔法使いたちは皆、空中で杖を抜き、魔法を構築している。火、風の遠距離

魔法が多い。

その魔法が自分たちに届く寸前までマークは待った。そして、あと少しで魔法が当たってしまう

というところで剣を引き抜く。

「炎閃」

言葉と共に繰り出される斬撃。その剣にはマークが溜めた魔力が込められていた。斬撃は魔法にぶつかり、それを切り裂く。

切り裂かれた魔法は火に包まれ燃えていく。

自分の生み出した魔法が燃えるという状況にアーサー派の魔法使いたちは戸惑い、動きが一瞬止まる。

マークの斬撃はそれだけでは終わらなかった。切り裂いたところから生まれた炎は円を描くように広がり、空中にいる魔法使いたちに襲いかかる。

「ぐあっ」

それを浴びた魔法使いたちは痛みで「飛行」を維持できずに、地面に落ちる。

辛うじてかわした他の魔法使いがマークに標的を絞^{しぼ}り、追撃しようとするが動きが半歩遅い。

その時にはすでにマークは飛び上がっており、突きを繰り出していた。

空中で繰り出される突きの連撃。

その一つ一つが炎を纏^{まと}い魔法使いたちを襲う。

マークが地面に着地した頃には襲ってきた魔法使いたちは皆、地面に倒れていた。

「火を消してやってくれ。その後は拘束して後方に……誰も死なせるな」

マークが指示をすると、後ろで見ていたヒースクリフ派の魔法使いたちが倒れたアーサー派の魔法使いたちにかける。

マークが倒した者の中に動ける者はいない。

誰も死んではない。

マークは剣を取め、残党がいまいか確認した。

今の中に悪魔がいまいことはわかっていた。悪魔がいればこんなに容易^{たやす}く片付くことはなかっただろう。

第一陣に悪魔がいなかったのなら悪魔はそもそもここに来ていないか、それとも隠れてこちらの出方を窺^{うかが}っているかのどちらかだ。

恐らく後者だろう。

マークは自分の読みを信じて警戒を解かなかった。そしてその読み通り、その後すぐに悪魔は姿を現した。

「人間のくせに、なかなかやるようだな」

突如として宙に現れたソイツはマークを見下ろして笑う。マークは剣に手をかけたまま、来訪者を見上げた。

「総員退避……ここは俺に任せろ」

現れた悪魔から決して目を離さずにマークは告げる。何が起こるのか理解したその場にいた魔法使いたちは、すぐに指示通りに避難する。

「よし、遊ぼうか小僧」

そう言っつて宙から降りてくる悪魔。

マークの前に現れたのはア・ダルブだった。

◇

上空から降りかかる燃えた岩の塊をオードは辛うじて避けた。

逸れた岩はそのまま建物にぶつかり、倒壊させる。岩から燃え移った火が建物に燃え移るのをオードは逃げながら見ていた。

「おいおいどうした？ 挑みに来たんだよな、人間。だつたら何故逃げる？」

楽しくて仕方がないといった様子でオードを追いかけ回しているのは悪魔の一人である。

燃えた岩を生み出し続ける彼女からオードは逃げ回るしかなかった。つい先程までオードはマークと同じように別の地点で藁を燃やして陽動していた。

そこに現れたのが彼女だ。

兵士を引き連れず、たった一人で現れた彼女は突如として巨大な燃える岩、「隕石」の魔法を發動させた。

一瞬の間に出現した燃え盛る岩に対抗できる者は、その場にはいなかった。

藁を積んだ荷車は粉々に、さらにその魔法の衝撃で付近のいくつかの家が倒壊する。

その状況に分が悪いと判断したオードは、精霊の魔法を行使して注意を引きつけた。

味方の魔法使いたちとは逆方向に走り、一人で悪魔の魔法に対処する。

「おいおい、どうしたんだよ人間。お前、精霊の主人だろ？ 魔力でわかるぞ。なのになんで攻撃してこない」

悪魔の言う通り、オードはただ逃げ続けるだけだった。

街の入り組んだ道を走り回るが、決して撒こうとする動きではない。

時折後ろを振り返っては悪魔の位置を確認している。

「ああ、なるほど」

悪魔は納得して歩みを止める。ちょうどオードも逃げるのをやめた。悪魔は周囲の建物を見渡す。

先程まで通っていた道にある建物よりも、街並みが豪華になったように見える。

「貴族連中の家……か」

呟く悪魔にオードは頷く。

「そうさ、ここならどれだけ暴れても住人に被害は出ない」

オードが逃げ回ったのは王都に住む人たちに危害を加えなくなかったからだ。

アーサーを止めるために始まった今回の作戦。開始するよりも前にヒースクリフ派の魔法使いたちは何も知らない王都の住人たちに避難を呼びかけている。

王子同士の権力を巡った戦いに国民を巻き込むわけにはいかないという、ヒースクリフの考えがあったからだ。

オードが最初に藁を燃やしていた場所。そこはまさに平民が住む地域だった。商店が立ち並び、大通りに面していて目立つたために陽動はそこで行う方が効果的だった。

しかし戦闘は違う。

付近の住人たちはすでに避難しているか、アーサーの戴冠たいかんを見に広場に集まっていて無人だっただろう。だが建物があった。戦闘で壊れた建物は時間をかけなければ元に戻らない。

戻るまでの時間、そこに住んでいた人たちに苦痛を強いることになる。

オードは最初から、陽動が成功したら貴族たちの屋敷が建つ王都の中央におびき寄せるつもりだったのだ。貴族たちは皆、アーサー派かヒースクリフ派に分かれている。

この騒動の原因も知っていて、当事者とも言えるだろう。屋敷が壊れても別荘や頼る伝つてがあるだ

ろうし、平民を犠牲にするよりもいいというオードの考えだ。

まんまとおびき寄せられた悪魔だが、その表情は先程よりも高揚している。

オードが逃げるのをやめたということは、これから戦闘が始まるということ。それは彼女にとつて朗報と言える。

悪魔にも性格は様々あるが、激しい戦闘を好むという点において彼女の右に出る者はいない。

悪魔は頭上に「隕石」を作り出す。

オードは覚悟を決めて杖を構えた。

「おい、人間。せっかくだ、お前の名前を聞かせろ」

「悪魔に人間的な決闘の慣習を守る意思があるとは思わなかったね。王都出身貴族、オード・マグナガルだ」

ニカッと悪魔が笑う。

その笑みが余裕の表れなのか、精神の昂たかぶりなのかオードにはわからない。

不気味な笑みだった。

「いいぜえ。せいで知恵を絞って戦ってくれ。狂気の悪魔、ア・ドリスだ」

王都の中央、東寄りの貴族地域でオードとドリスの戦いが始まった。